

2023 年春季大会「学生セッション」レポート

1. 全体の様子

学生会員による研究準備発表企画である「学生セッション」は、本大会では初の対面実施となりました。一般ポスター発表と同様、各発表者はポスターに基づいて研究内容を説明し、立ち寄った参加者の質問やコメントを受けて議論を展開していました。

今回の発表者は 5 名と少なめながら、研究分野は文法・語彙・文体・敬語・方言などバラエティーに富み、それぞれ活発な議論を生んでいました。コロナ禍を経ての久々の対面開催とあって、ポスター発表という形式に馴染みがなかった発表者も、2 巡目・3 巡目の発表に移る中でプレゼンの仕方を工夫し改善していったのが印象的でした。

セッションの方法としては、1 枚のポスター内に研究の目的・方法・調査結果・分析・今後の課題といった項目を区分けして示し、それら各々について概略を説明した上で、参加者との質疑応答が行われました。

参加者からは、調査の方法や用例の扱い方・分類の仕方について等の質問・アドバイス、またその研究に関連する隣接分野や言語事象の紹介、関連文献の教示など、色々な方面からの質問・コメントが行われ、発表者を応援し各研究をより良くしていこうとする雰囲気が出てきました。

2. 発表者からのコメント

米村雪乃さん（東京外国語大学学生）

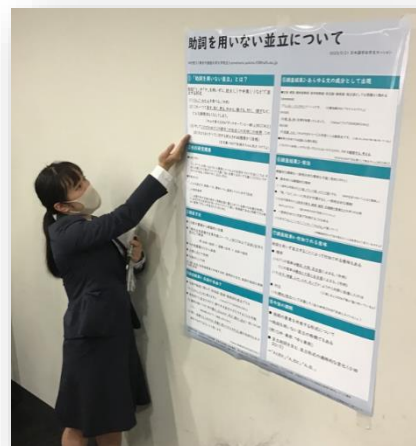
発表題目：助詞を用いない並立について

Q：今回「学生セッション」に応募したきっかけをお教えてください。

A：卒業論文として取り組んだ内容を発表しました。卒論としてまとめる際には、ゼミでしか意見をもらう機会がなかったので、より客観的な意見を、色々な分野の方々からもらいたいと思って応募しました。

Q：発表準備をする中で困ったことなどはありましたか？

A：ポスター発表は初めてだったので、学会がテンプ



レポートを用意してくれていたのは役に立ちました。卒論の内容をまとめ直したのですが、どこをカットするかが難しかったです。所属ゼミとは別のゼミの先生にも見てもらったりしました。

Q：発表してみていかがでしたか？（感想、課題など）

A：視野が広がりました。自分では当然視していた部分に質問があったりして、定義の甘さに気付くことができました。

Q：学生セッションや日本語学会に要望などあればお教えてください。

A：発表内容を予稿集に載せられると説明がよりやりやすくなると思いました。

佐藤未依奈さん（東北大学学生）

発表題目：テレビドラマにおける方言語彙の使用と制作者の意図

Q：今回「学生セッション」に応募したきっかけをお教えてください。

A：発表内容はこれから修士論文として仕上げていきたいものですが、より広い見地から意見をもらうことで自身の研究の位置付けを明確にしたかったためです。また、現在、修士 2 年生ですが、今後博士課程に進んで本格的な研究を行っていくためにも、日本語学会で発表をしておきたいと思いました。

Q：発表準備をする中で困ったことなどはありましたか？

A：どれぐらいの量を調査すれば研究として発表可能なのかという点がよく分からず困りました。また、ポスターの作り方（字の大きさやイラストなどをどうするか）にも苦労しました。

Q：発表してみていかがでしたか？（感想、課題など）

A：対面開催のポスター発表の大変さを感じました。オンライン発表と比べて大きな声を出し続けることが大変で、最後は息切れしてしまいました。ポスターのどこに何を書くかが大事だと感じました（例えば、結論など大事なことをいちばん下に書くと、聴衆の視線が下がってしまい、議論がしにくいと感じました）。

たっぷり時間があって、様々な人から意見や具体的な助言をもらえたことがとても良かったです。



特に、同世代の人から意見がもらえたことがよかったです。

Q：学生セッションや日本語学会に要望などあればお教えてください。

A：予稿集に載る、または学会サイトに掲載するなどの形で、発表内容が予め共有できるとより良いと思いました。またポスターに載せるかどうか迷った例なども多かったので、そうしたものを記した追加資料の配付を認めてもらえると良いと思いました。

小出素さん（早稲田大学学生）

発表題目：調理レシピの表現に関する分析 ―オノマトペの使用とその文体的特徴について―

Q：今回「学生セッション」に応募したきっかけをお教えてください。

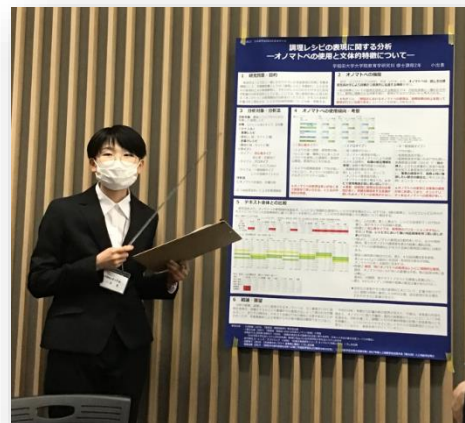
A：指導教員の先生から声がかけてあって、応募してみることにしました。発表内容は今後、修士論文として仕上げていきたいもので、分析方法や調査方法などに意見がもらえると良いと思いました。

Q：発表準備をする中で困ったことなどはありましたか？

A：対面の学会自体が初めてだったので、ポスター発表を見たこともなく、時間配分をどうするか等、試行錯誤の連続でした。

Q：発表してみていかがでしたか？（感想、課題など）

A：勉強になりました。一般的な学会発表だと質問も仰々しいものになりがちですが、ポスター発表だと気軽なレスポンスが得られるのが新鮮でした。研究内容をどう表現するとよく伝わるかなど、課題が見えました。



吉岡花菜さん（明治大学学生）

発表題目：アクセント型と語彙が同一の単語も方言になり得るのか ―「バインダー」を用いた意味による方言の分類―

Q：今回「学生セッション」に応募したきっかけをお教えてください。

A：何か研究をして発表をしてみたかった。現在は、理工学部の3年生で研究室配属前なのですが、何か研究をしてそれを発表してみたいと思い、この学生セッションに応募する

ことにしました。今回発表した内容は、関東出身の友人と話していて、広島出身の自分と、「バインダー」という語の意味が違っていることに気づき、そういう現象が生じている事情を明らかにしたいと考えたものです。

Q：発表準備をする中で困ったことなどはありましたか？

A：大きなポスターをどうやって印刷したらよいかに困り、最終的には、配属予定の研究室の先生に頼んで、印刷をさせてもらいました。それから、アンケートの被調査者の人数（98名）を集めるのが大変でした。

Q：発表してみていかがでしたか？（感想、課題など）

A：ひとりで研究と発表準備をしていたので、不安でいっぱいでしたが、多くの人に関心を持って聞いてもらえ、色々と具体的なアドバイスをもらえたので、とても嬉しかったです。研究についても、発表の仕方についても、自信になりました。



Q：今後この題材をどうしていきたいですか？

A：今回扱った語について、地域差に加えて、世代差についても研究したいです。また、他にも語形が同じで意味の異なる方言を探して実態を調査したいです。

成田智也さん（大阪大学学生）

発表題目：敬語の分析に必要なのはウチ・ソトの概念ではなく談話管理理論である

Q：今回「学生セッション」に応募したきっかけをお教えてください。

A：親しくさせていただいている先生から「日本語学会で発表して意見をもらったらどうか」とお話をいただいたからです。敬語というテーマ自体は、昨年度の大学での講義とそれに関わる読書がきっかけで、この発表では、素材敬語に対者敬語的な効果があると仮定することについてコメントをいただきたいと思っていました。

Q：発表準備をする中で困ったことなどはありましたか？

A：初めての発表でしたので難しい点は多くあり、解決できないまま発表を行なってしまった点もありましたが、お世話になっている先生や先輩方から親切なご指導をいただくことができました。

Q：発表してみていかがでしたか？（感想、課題など）

A：多くのコメントをいただくことができて大変よい経験になりました。素材敬語に對者敬語的な効果があると仮定する点についてだけでなく、方言の事例など様々なコメントをいただき勉強になりました。
また、発表当日だけでなくその準備に際して先生方や先輩方に話を聞いていただいたことも非常にありがたく感じました。

Q：今後この題材をどうしていきたいですか？

A：今回の発表テーマそのものとは異なりますが、卒論ではこれに関連した事象を扱うつもりです。

